

Readings by Women of Modern Japanese Literature

女が読む日本近代文学

フェミニズム批評の試み

江種満子 編
漆田和代

関 礼子
沼沢和子
小林富久子
田嶋陽子
坂田千鶴子
千種・キムラ・スティーブン
ジョリッサ・グレイスウッド



Modern Japanese Literature

女が読む日本近代文学

フェミニズム批評の試み

江種満子
漆田和代 編

関 礼子

沼沢和子

小林富久子

田嶋陽子

坂田千鶴子

千種・キムラ・スティーブン

ジョリッサ・グレイスウッド

編者紹介

江種満子 (えぐさ みつこ)

1941年生れ。東京教育大学大学院博士課程修了。文教大学教授。
著書・論文『有島武郎論』桜楓社、1984年。「『迷路』のなかの女性たち、
および胎児—セクシュアリティ、アイデンティティ、階級—」『安川 定
男先生古稀記念 近代日本文学の諸相』（共著）明治書院、1990年。
「女性作家とアメリカ大庭みな子『構図のない絵』論のために—」『昭
和文学研究』22集、1991年2月。

漆田和代 (うるしだ かずよ)

1941年生れ。お茶の水女子大学文教育学部卒業。エッセイスト、居酒屋
じょあん代表、東京フェミニストセラピセンター運営スタッフ。
著書・論文「『婦人』『女』『女性』……—女の一般呼称考—」『地軸』3
号、1980年8月。「保井コノ」円地文子監修・近代日本の女性史11『苦
難と栄光の先駆者』（共著）集英社、1981年。「女性学的文学研究の地平」
女性学研究会編『講座女性学4 女目で見る』（共著）勁草書房、1987
年。



女が読む日本近代文学 フェミニズム批評の試み

初版第1刷発行 1992年3月10日©

編者 江種満子・漆田和代

発行者 堀江 洪

発行所 株式会社 新曜社

〒101 東京都千代田区神田神保町2-10 多田ビル

電話 (03) 3264-4973 (代)・振替 東京 2-108464

印刷 真珠社
製本 イマキ製本

Printed in Japan

ISBN4-7885-0412-X C1095

人 名 索 引

あ 行

- アウグスティヌス 46
 芥川龍之介 90
 有島武郎 1, 24, 72
 井原西鶴 45, 130
 イブセン, H. 12
 巖本善治 10
 植木枝盛 10
 ウォーカー, A. 147
 ウルフ, V. 35
 江藤淳 122, 123
 円地文子 121~147
 岡本一平 89
 岡本かの子 87~115

か 行

- 加藤シヅエ 82
 カフカ, F. 139
 カミュ, A. 139
 亀井勝一郎 87, 88
 川島武宜 193
 川端康成 149~178, 181~205,
 207~235
 紀貫之 45
 小島信夫 21

さ 行

- サイデンステッカー, E. 174,
 207

- サルトル, J.-P. 77, 139
 サンガー, M. 81, 82
 志賀直哉 1~27, 69, 73
 親鸞 101
 瀬戸内晴美 87

た 行

- 高橋たか子 146
 高見順 121, 123
 高村光太郎 78
 谷川徹三 7
 谷崎潤一郎 1
 田辺(三宅)花園 36, 37, 39, 44,
 46, 47
 田村俊子 77
 鶴屋南北 132
 寺田透 156

な 行

- 長沼智恵子 78
 中村光夫 174
 長与善郎 68
 夏目漱石 1, 63
 成瀬仁蔵 11
 ノイマン, E. 208~235

は 行

- バダンテール, E. 9, 10
 馬場辰猪 10
 半井桃水 40~44

人名索引／作品名・誌名索引

- | | | | |
|----------------|------------------------|-------------|-----------------------|
| 樋口一葉(なつ) | 31~51 | 三島由紀夫 | 123, 174, 207 |
| 平塚らいてう | 12, 71, 72, 78, 82, 83 | 宮本(中条)百合子 | 55~83, 123 |
| 福沢諭吉 | 10 | ミレット, K. | 191 |
| 福田英子 | 17 | 武者小路実篤 | 1, 12, 68, 69, 72, 73 |
| フーコー, M. | 31 | 紫式部 | 131 |
| 藤原道綱の母 | 132 | 森鷗外 | 45 |
| フロイト, S. | 152, 222, 223 | | や 行 |
| ペロー, C. | 235 | ユング, C. G. | 208 |
| ボージュワール, S. de | 77, 143, 210, 224, 225 | 吉行淳之介 | 130 |
| 本多秋五 | 56 | | ら 行 |
| | ま 行 | ルソー, J.-J. | 10, 11, 46 |
| マラルメ, S. | 32 | ロレンス, D. H. | 153 |

作品名・誌名索引

- | | | | |
|-----------|-------------------|----------|------------|
| | あ 行 | お目出度き人 | 1 |
| 青臭帖 | 69 | 女ざかり | 77 |
| 曉月夜 | 44 | 女作者 | 77 |
| 朱を奪うもの | 145 | | か 行 |
| 或る女 | 2, 24, 25, 57, 72 | 改造 | 55, 60, 72 |
| 或る女のグリンプス | 1 | 概念と心其もの | 71, 73 |
| 暗夜行路 | 1~27, 69 | 解放 | 72 |
| 伊豆の踊子 | 171 | かの子撩乱 | 87 |
| 刺青 | 1 | 蜻蛉日記 | 132 |
| うもれ木 | 44 | 川の妖精 | 88 |
| エミール | 10 | 金魚撩乱 | 115 |
| 惜みなく愛は奪ふ | 72 | グレート・マザー | 208~235 |

源氏物語 38, 131

好色一代女 45

国民之友 45

こゝろ 63

渾沌未分 87~115

さ 行

作品1(樋口一葉) 37, 41, 42

作品2(〃) 41, 42

作家論(三島由紀夫) 123

五月雨 44

自作案内 肯定の母胎 101

C先生への手紙 72

しのふくさ 43

女性 72

女性改造 72

白樺 12, 68, 71~73

青鞥 12, 71, 73, 78, 82

性の政治学 191

それから 1

た 行

第二の性 208

太陽 72

たま櫛 44

中央公論 72

鶴は病みき 90

土佐日記 45

とはずがたり 45

な 行

眠れる美女 207~235

眠れる森の美女 235

は 行

羽衣 176

花は勁し 88, 89, 110, 115

半世紀 145, 146

婦人公論 72

婦人と文学 123

二つの庭 71

文学界(明26刊) 36, 46

文学界(昭8刊) 90

文芸 90

ま 行

舞姫 45

都の花 36, 46

や 行

八重桜 36~39

山の音 181~205

闇桜 44

雪国 149~178, 207

雪の日 40, 44, 45, 47, 50

四谷怪談 132

ら 行

老妓抄 88, 89, 110, 115

わ 行

わが心の遍歴 68

別れ霜 44

妾の半生涯 17

我等 72

はじめに

小説や詩などの文学テキストを読むとき、読者が男性であるか女性であるかによって、同じテキストでも別々の読みがあり得るということは、日本でも経験的には早い時期に気づかれていた。

けれどもそのことが大きな問題として、やがてはフェミニズム批評にまで発展する萌芽であるとは、まだ見通されてはいなかった。

たとえば一九六〇年代の中頃（本書の執筆者は、少し若い二人以外は全員が一九六〇年代に日本の大学の文学部に学んでいる）、こんなエピソードが身近にあったことを思い出す。それは、文学とはちがう道に進んだ女性のことだったが、彼女は夏目漱石の『こゝろ』について、『こゝろ』の先生はなぜ、親友Kの自殺や先生自身の自殺に至る心の経緯を奥さんに話さないのか、なぜ先生は奥さんを「純白」のままに隔離するのか、よく理解できないと言ったのだった。

いまから三〇年近い以前の日本近代文学の研究状況では、研究者のだれもがそのような問いを、部外者の女くさい幼稚な感想として一笑するのがつねだった。当時の文学研究では、小説や詩などは、特権

的な才能が生み出した特権的な言語世界として、読者の同列の参加を寄せつけない、それ自体で完結した「作品」としての位置を誇っていた。

けれどもいまや、その女性を感じたような疑問は、三枝和子の『恋愛小説の陥穽』（新潮社、一九九一）が語る漱石の読みの線では、文学的な市民権を得ているのであり、漱石という男性作家の男性的偏向を免れなかった言説として批評されてもいる。

このように、近年の文学表現にたいする見方は、読者から特権的に隔てられた「作品」という位置から、「テクスト」という開かれた位置へと、歴史や読者その他を含み得るものとして大きく変ろうとしている。そしてじつはこの変化にフェミニズム運動が果たした役割はきわめて大きい。一九七〇年前後から米英仏を中心として高まったフェミニズムの動きは、文学テクストだけでなくあらゆるテクストを、女性が自身の体験に照らし、女の視点から批評的に読み直す仕事を積み重ねてきたのである。文学にかぎってみても、男女の読みのちがいに執拗にこだわったものとして、もはやフェミニズム批評の古典的著作になった観のあるケイト・ミレットの『性の政治学』（*Sexual Politics*, New York, 1970）をはじめ、エレン・モアズ、アドリエンヌ・リッチ、エレイン・ショウウォーター、バーバラ・ジョンソン、ジュリア・クリステヴァなど、ここに書ききれないたくさんの女性の、刺激的で洞察に富む、貴重な仕事が開示されてきた。日本では駒尺喜美のいち速い対応による草創的な仕事らがなされたことを、特記すべきであろう。

ところで、このように文学テクストを、女の視点で、女が主体的に読む、とはどういうことなのか。

この問いは、フェミニズム批評が提起してきた最大のポイントの一つ、性的差異ジェンダーの文化の実態をクロ
ーズアップさせずにはおかない。フェミニスト言語学者の指摘するとおり、人間世界の文化は、言葉を
通して男性中心に構造化されている。人間は幼児期にその所属社会の言葉を学びはじめるとき、同時に
「父」との関係を中心にして自我を育てはじめるが、それは当該社会の父―男―権力が仕組む象徴界に
参入することにほかならない。

つまり言葉の学習は、象徴界としての社会の諸制度を内面化することなのだ。しかも社会のなかを流
通する言葉は、けっしてニュートラルではない。幼児期から学習される言葉は、象徴としての「父」に
よって、性の文化色ジェンダーに染められている。男の子は男ことばを、女の子は女ことばを学ぶ。あるいはま
た、海や月は女、太陽や山は男、なども学ぶ。あたかも人類より古い地球が、本来的に男女の軸で分
節化されていたかのように言語化しつつ、その言葉の力は、人間にたいするジェンダー化もまた永遠不
滅の真理であるかのように錯覚させることに成功してきた。言葉は権力ある手に操作されて、男性中心
の父権的イデオロギーを支え、女性を母性的存在に局限し、その反面で女性のセクシュアリティや主体
性を抑圧し、男女双方に性差別意識を刻みこむ。

さて本書の八つのテクストが「フェミニズム批評の試み」として目指したものは、これでおのずから
明らかであろう。文学テクストの言葉は、書き手の意識無意識を問わず、その社会的性格によって女性
を抑圧する言説に傾きやすく、それを読む者を感染させては性差別の構造をますます再生産する。一つ
にはその仕組みを見究めることであり、またさらにそのうえで、同じテクストのなかに女性の主体がき

らめく瞬間をあやまたず発見することである。そしてさらに願わくは、少しでも性差別を超えた彼方を構想することである。私たちはそのために、文学テキストに深く分け入り、丹念な、しかし冒険的な読みを試みたつもりである。

最後に、本書が日本近代文学の研究者や大学院生・学生、あるいは文学を愛好するたくさんの女性や男性によって、広く興味をもたれ、批評の対象と目されるなら、これ以上の幸いはない。

一九九二年一月

江種 満子

目次

はじめに（江種満子） i

『暗夜行路』の深層……………江種満子 i

- 一 謙作の「幸福」
- 二 イデオロギーとしての「良妻賢母」
- 三 女の罪、女のエロス
- 四 『暗夜行路』の深層

* * *

闘う「父の娘」——一葉テキストの生成……………関礼子 31

- 一 作者／テキスト／性的差異
- 二 読み手と書き手の性的差異
- 三 花圃のテキストの意味するもの
- 四 ジャンルの掟Ⅱ性的差異の掟
- 五 女性表現者の女性一人称
- 六 一葉的エクリチュール

『伸子』のプロポーズ……………沼沢和子 55

一 はじめに

二 伸子と佃の出会い

三 「冬眠」削除の意味

四 結婚へのためらい

五 「仕事」というキイ・ワード

六 プロポーズ

七 結婚の条件

『渾沌未分』（岡本かの子）を読む……………漆田和代 87

一 はじめに

二 「渾沌未分」と存在論的「投企」

三 「海豚の歎び」・「渾沌未分の境涯」・「九淵の説」

四 拮抗する意味・イメージ

五 物語の時間

六 おわりに

『女坂』―反逆の構造……………小林富久子

一 序―二種の『女坂』解釈

二 『女坂』における二重構造

三 行友とその世界

四 女性に対する見えない圧力―男性中心的イデオロギーと父権的権力システム

五 倫のめざめの物語

六 結末の意味

七 女性中心の伝統の構築―結びにかえて

* * *

6 駒子の視点から読む『雪国』……………田嶋陽子

一 母子姦の夢

二 桃源郷の女

三 抑圧を脱ぎ捨ててゐる駒子

四 島村のうしろめたさ

五 へ女は自然

149

7 『山の音』―ズレの交響……………坂田千鶴子

一 山の音―予告されたのは誰の死か

二 「お」ずれの挿話の意味

181

- 三 信吾と保子、房子と修一のズレやさしいのは誰か
- 四 信吾と菊子のズレ(1)——さざえの壺焼きの分配
- 五 信吾と菊子のズレ(2)——それは愛の告白であったのか
- 六 菊子と絹子——産まない女と産む女のズレ
- 七 菊子の〈死と再生〉——日まわりとマアガレット、そしてからす瓜へ

母性幻想を織る男⁸

『眠れる美女』ノート——……千種・キムラースティープン
ジョリッサ・グレイスウツド

207

- 一 死と再生の願望
- 二 聖なる処女母神
- 三 テリブル・マザーの誘惑
- 四 江口とその母
- 五 母における処女性
- 六 グッド・マザーへの憧憬とテリブル・マザーの抹殺

あとがき(漆田和代)

239

——日本文学におけるフェミニズム批評の活性化をもとめて——

人名索引／作品名・誌名索引

1 『暗夜行路』の深層

江種満子

『暗夜行路』の発表は、大正八（一九一九）年（「憐れな男」、『暗夜行路』第二―十四）に始まり、昭和一二（一九三七）年（『暗夜行路』第四―十六―二十）に終わる。この小説は、明治末年前後を生きた二十代半ばの青年時任謙作の、エロス（愛）と友情と仕事をめぐる物語である。とりわけエロスをめぐる相に重心があり、読者を何度でも誘いかけてやまない謎と魅惑に満ちた、密度の濃い表現が達成されている。

日本の明治晩期の文学は、人間の本源として働くエロスについてのとらえ方が、いっせいに肯定的な方向へ転じたところに、特徴があるといってもよいだろう。たとえば、夏目漱石は『それから』（明治四二―一九〇九）を書き、代助のエロスを、「自然」への立ち返りという形で、漱石としてはかつてない積極さで肯定に転じており、武者小路実篤の『お目出度き人』（明治四四―一九一〇）の主人公などは、「自分は女に餓えてゐる。／誠に自分は女に餓えてゐる」と、小説ののっけから公言してはばからない感覚の持ち主である。また、谷崎潤一郎の「刺青」（明治四三―一九一〇）や、有島武郎の「或る女

の「グリンプス」(明治四四—大正二—一九一一—一九一三、のちの『或る女』前篇〔大正八—一九一九〕の前身)などにいたっては、かつてない自由な目で、女のエロスをも凝視しはじめたのである。『暗夜行路』の時任謙作は、そのような時代の中を生きる若者として立ち現われる。

と、ここまで不用意にエロスという言葉を使ってきたのだが、本稿では、とりあえずつぎの意味でエロスという言葉を使うことにする。

エロスの語源としてのギリシア神話のエロスは、ギリシア神話の天地創造の段階ではやばやと現われ、闇の神と夜の神を手引きして、天上の浄光の神と昼の神とを誕生させる始源神的な役目を持つ。つまり、二つの相異なるものを関係づけて、新しいものの誕生に導く。いわば、生成へ向けての関係づけという作用性を、その本質としている。この語源から、人間の男女の二つの性がそれぞれの生命力を豊かにするために、おたがいに惹きつけ合い、志向し合う、そうした性的な内在作用のことを、エロスと呼んでおきたい。

ところが、そうしたエロスの視座からテクスト化されるようになった近代文学の中の男女にとって、エロス(愛)はすでに神話の時代からほど遠く、彼らのアイデンティティを実現するものとしての欲求を担いながら、同時にまた、自分の愛する相手を支配し所有する欲求としても働くために、近代のエロスの愛には、自己対他者の存在論的な葛藤が、避けがたく刻みこまれているのである。『暗夜行路』も例外ではない。

『暗夜行路』のエロスの場合は、主人公の側から見ると、時任謙作がさまざまな女性とのさまざま

な関わり方を通して、彼の最良と想うエロスの関係を妻の直子との間に築き上げるまでを前半部とし、後半では、そうした彼のエロス観にとってはまことに不都合な、妻自身のエロスの発現のために、その認識が危機に陥り、再構築が計られる、といった展開を見せる、と言っておけばよいだろうか。けれどもじっさいには、テキスト生成にかかわる主人公、直子、語り手、作者がそれぞれに、テキストの肝要なところで不可解にくいちがい、むしろ読者の目にうつる『暗夜行路』のエロスは、そのテキストの空白部においていちばん魅力的な問いかけに満ちているといえそうである。

一 謙作の「幸福」

『暗夜行路』の時任謙作は、自分の求める幸福にとって、ぜったい欠かせない要素の主なものとして、女との関わりがあることを知っていた。そして彼がその女に託す条件は、後に述べるように、その時代の男たちに広く一般的だった一つの典型的なイデオロギーの存在を、思わせる。

謙作が近い将来の自分の幸福を想うとき、自分の妻となる女に抱くイメージは、くっきりとした原型をもっている。たとえばこれまでも、『暗夜行路』論の多くが話題にしてきた第一―六のくだりは、『暗夜行路』のハイライトの一つである。謙作が友人たちと銀座で飲食に夜を過ごし、それから友人と二人で吉原のお目あての茶屋に行って遊び、そこへ泊り、さらに翌日もそこに居続け、ようやく夕暮れになってから、身心のだるさを覚えながらもそこを出、電車に乗り、日本橋の小料理屋を経て再び銀座へ出、